（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏 名　　池田　晋（いけだ　すすむ）

表現対象を発話者の視点から発話場面の時空間的座標に位置づけるための意味機能範疇をダイクシス(deixis)という。本論文は、中国語のダイクシス(deixis)の範疇に属する指示詞――“这”[これ]・“那”[あれ]――と、直示移動動詞――“来”[来る]・“去”[行く]――を取り上げ、それらが派生的に担う連接機能のメカニズムを明らかにしようとしたものである。中国語の指示詞には、指示詞本来の指示機能のほかに、名詞と名詞を連接して(たとえば“我－这－书”[私の-この-本]のような)名詞句を構成する機能があり、また、直示移動動詞には、動詞本来の述語機能のほかに、動詞と動詞を連接して(たとえば“拿起－来－看”[取り上げ-て-見る]のような)動詞句を構成する機能がある。従来、この種の連接機能を詳細に論じた研究は少なく、直示移動動詞の連接機能に至っては、統語的にも意味的にも未だ十分な特徴づけがなされていない。本論文は、指示詞と直示移動動詞がそれぞれに有するダイクティックな空間性に着目し、その空間性を基盤として当該の連接機能が獲得される文法化の経緯を明らかにし、加えて、指示詞または直示移動動詞を介して構成される句構造の意味特性を明示的な統語的根拠および談話論的根拠に基づいて明らかにした。

本論文は７章から成り、第１章では本論文の考察の対象と目的を提示する。

第２章では、２つの名詞(句)の間に指示詞が介在する句構造(以下、「N_1-Dem-N_2」と記す)を考察対象とし、先行研究の議論を丹念に検証した上で、凡そ N_1-Dem-N_2 の成立は、指示詞が一連の場所詞と同様に有する後接的(enclitic)な「場所化機能」と前接(proclitic)的な「連体機能」の同時発動によって支えられているという統語事象を確認し、ここに指示詞の「空間系連接機能」を見出す。加えて、25 万字のテクスト・コーパスを対象とする観察の結果、N_1 に用いられる名詞は、人称代名詞に代表される人物名詞が圧倒的多数を占めるという、当該構造の意味的特徴を理解する上で極めて示唆的な事実を指摘する。

第３章では、指示詞の空間系連接機能の一翼を担う「連体機能」に焦点を当て、指示詞が量詞(＝日本語の助数詞に相当する語類)を伴いつつ後ろの名詞を修飾するタイプと、量詞を伴わずに修飾するタイプの対立を論じ、前者には指示対象を他者から区別(single out)する働きや、談話内に新規導入する働きが顕著であるのに対して、後者には談話空間に既に確立されている対象を指示する働きが顕著であるという意味的対立の傾向差を談話分析の観点から明らかにする。

第４章では、N_1-Dem-N_2 の意味構造を、形態上 N_1-Dem-N_2 と対立する「N_1 的-Dem-N_2」構造との対比において考察し、N_1 的-Dem-N_2 が、カテゴリカルな観点から対象(N_2)を限定するための内包的連体修飾構造であるのに対して、N_1-Dem-N_2 は、グラウンディングの観点から対象(N_2)を空間的に位置づけるための外延的連体修飾構造であると捉え、N_1-Dem-N_2 の意味構造を、従来の指摘よりも一層明確に特徴づけることに成功する。

第５章では、２つの動詞(句)の間に直示移動動詞が介在する句構造(以下、「V_1-来/去-V_2」と記す)を取り上げ、本構造が、V_1 を V_2 の<準備行為>として言語化するための構造であること、さらには、本構造が、“来/去”が使役移動を表す補語成分として２つの動詞(句)の中間に生起するかたちの連動構造(serial verb construction)に由来し、“来/去”の再分析と文法化を経て派生的に生まれた構造であることを、諸々の有力な統語的根拠と談話的根拠に基づいて論証する。

第６章では、ダイクティックな特性に由来する指示詞と直示移動動詞の意味的および統語的類似性を新たな観点から指摘し、第７章では、本論文のまとめと今後の発展的課題を提示する。

部分的ではあるが、論点の検証や議論の詰めにやや不十分な箇所があること、文法化について歴史的な観点からの目配りが十分ではないことなど、いくつかの改善点が残りはするものの、真の文法形式に乏しい孤立語としての中国語にあって、その欠如を補うが如くに、ダイクティックな形式が文法形式化する経緯を共時論の観点から明快に提示した本論文の成果は、ダイクシス研究の領域のみならず、広く中国語の文法研究に大きく貢献するものとして評価される。また、N_1-Dem-N_2 と V_1-来/去-V_2 の構造について、先行研究のいずれをも凌いで、より明確、且つ一般性の高い特徴づけに成功した点も高い評価に値する。

以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。